

## 管 弦 楽 団

### ファゴットと私

大15工卒 Fg 国 沢 新 太 郎

私は元々中学時代からレコードを集めたり、仲のよい友人とコーラスなどをしたりしていたので、音楽は好きな方であった。しかし、楽器をいじくることはしていなかった。一高2年のある日、中学時代からの同級生が私に一高の音楽同好者の集いである楽友会に入会して、そのオーケストラで何か楽器を吹かないかと勧誘された。その友人は私にピッコロという楽器が誰も使わずに置いてあるからどうかということであった。当時私はオーケストラの中でどんな楽器が使われているかなどということは余り知っていなかった。もちろんピッコロが何であるかも知らなかったが、何でもよいから引受けようと思った。あとになって考えると、ピッコロはどうかといった友人もどうかと思うし、それを引受けるといった私もどうかと思う。しかし、数日後友人はピッコロは吹く人があるので、ファゴットを吹いてくれとやって来た。そしてまた数日たって楽器が届けられた。中根不羈雄先輩の曙町のお宅へ向って手ほどきを受けた。その後は戸山学校の軍楽隊のオーボエ吹き富田という人に教えを受けた。

こうして吹き方を習う一方、実際にオーケストラの一員としてファゴットを吹かされた。本郷追分のキリスト教青年会館でシューベルトの未完成交響楽を合奏したのが私の初舞台であった。中根先輩が1番私が2番ファゴットを吹いたこの第1回目の演奏会よりも第2回目の方が私には印象が深い。

当時一高の楽友会のメンバーは東大音楽部の応援に出掛けたものだ。鉄門に近い所に薬学科の教室と隣り合わせの木造の第3学生控室内にあった音楽部の練習室で毎週火曜日の夕方から練習が行なわれた。指揮者は軍艦マーチで有名な瀬戸口藤吉氏であった。そして練習をした曲はベートーベンの第4交響楽とヴァイオリン協奏曲のほかフィデリオの中の囚人の合唱の伴奏曲であった。合唱の伴奏は合唱の指揮者であった沢崎定之氏が指揮された。当時日本におけるオーケストラは陸海軍のものを除いては軍楽隊の手助けをしてもらわなければ自分のメンバーだけで演奏できる楽団はなかった。その中で東大音

楽部だけがどうやら東大生（一高生を含む）と先輩でメンバーを固めていた。したがって素人の編成している本邦唯一の管絃楽団というわけだった。その意味で一般音楽愛好者から注目されていたことは事実であったが、このベートーベンの曲の公開演奏が、こともあろうに音楽の総本山である上野の音楽学校（現在の芸大）の講堂で2日間にわたって行なわれたのであった。この2日間本邦初演の二つの大曲を聞きにこられたのか、講堂は満員で、第1日には安藤先生や幸田先生など、音楽学校の先生方がずらりと正面に席をとっておられたことを覚えている。

大学1年の時の9月1日は例の関東大震災であった。この震災の後大学構内にバラックが沢山建てられた。一部は学生の宿舎になり、一部は教室であった。そのバラックの教室で東大セトルメントの基金募集のための演奏会が開かれた。急造の机を並べた舞台の上で、薄暗い電灯の明りの下で演奏をした。

かくて春秋2回の東大音楽部の演奏会に出演のための練習を重ねている内に、どうやら一人前にファゴットが吹けるようになって来た。当時わが国ではファゴットの吹ける人は陸海軍の軍楽隊に数人いるだけで、ファゴット吹きはまことに希少価値があった。各大学の音楽会に引張りだこになってしまった。

大学3年のとき（大正14年）多数の白系ロシア人を日本に呼んで本格的なオーケストラを聞かせようという企てがあった。指揮者は山田耕筰氏と近衛秀麿氏が当り、ロシア人だけでは人数が不足なので、これに日本人が参加した。この楽団を日露交響楽団と呼んだ。希少価値先生もこれに呼び出される光栄に浴した。歌舞伎座の舞台で5日間にわたって演奏会が開かれ、音楽愛好者にそれまではレコードでしか聞かれなかったよき音楽を生で披露したものであった。このときの写真は大切にしていたが、その後引越しのときに無くしてしまった。先日山田耕筰氏の音楽回顧の番組でこの写真がテレビで紹介されなつかしく感じた。東京での演奏を終ってこの楽団は大阪へ移り、これにも参加して大阪の松竹座で公演した。

この日露交響楽団に参加したあと、しばらくして忘れたころに出演料を送ってきた。120円前後であったように覚えている。当時としては大金である。しかも出演料は余り期待していなかったのである。この金で銀座の十字屋や神田の仏蘭音楽書院などへ出掛けた、木管楽器の

合奏曲の譜面をかたっぱしから注文した。その後学校を出て勤めるようになって月給の一部を譜面を集めるのに使った。

そしてこれらの譜面を使って、ほとんど毎週1回木管合奏の練習を大久保にあった私の家で行なった。集ったメンバーはその時その時の東大オーケストラの木管のメンバーであったから一定はしていないが、これは楽しいことであったし、また技術向上に役立ったと考えている。このような練習は私の家が久保から移転するまで約10年位続けられた。

これら譜面の大部分はホルンを吹いていた市浦繁君の家に置いてあったので、私の千駄谷の家は戦災にあったが、焼けずに助かった。東大音楽部へ寄贈したので、今後部員の皆さんの練習のお役に立つことと思っている。

私は学校を出てから45年ゴム工業技術についての仕事を続けている。そのため今日いろいろな場所で講演などさせられるが、どんな時にも平気でいられ、一寸ぐらい間違いを犯しても何にも起らなかったような顔をして話の先をつづけることができるのも、実は私がファゴットを習いオーケストラの中でもまれて、舞台度胸ができて、サバを読むことを覚えたためだと思っている。

(天然ゴム研究所)

## 50年前を思い出して

昭2工卒 Vn 山田道彦

私の大学音楽部の生活は大正の末期のことで、丁度50年前即ち創立時代の事である。

中学時代から蓄音機でエルマン、ハイフェッツ、ジンパリスト、クライスラー等のヴァイオリンに親んだものである。

一高に入学し寮生活が始ると夜の時間を利用して人気のない教室で蠟燭で練習しているうちに一高楽友会に入り、多忠亮氏に師事することになった。この頃大学の音楽同好の士で「メオングルッペ」という仲間があって、音楽会を開くについて手伝えということで、始め第一ヴァイオリンの末席に坐り、メンデルスゾーンのイタリア交響曲を演奏したのも、自分にとって思出の第1楽章である。この「メオングルッペ」が次第に大きくなって、後に大学の音楽部となったので大学音楽部の母体と言える。

当時の日本の音楽的レベルは今日に比較すると幼稚園と大学の開き以上ではなからうか。プロの交響楽団は無

かったと思う。第一に定常的の管弦楽団は大学以外には音楽学校、早大、慶応位にしかなく、それも特殊の管楽器、ファゴット、真鍮楽器等は不足するので陸海軍の音楽隊から応援して貰っていたものである。音楽会の曲目にしても管弦楽は編成の上から管楽器の不足からクラシック音楽が主となり、20名位のものであった。又よく開かれる音楽会もヴァラエーションの様に声楽あり、ヴァイオリン独奏あり、合唱ありと実に多彩なもので、リサイタル等は殆どなかった。協奏曲を演奏してもピアノ演奏で1楽章をやるとい程度。何しろ協演する管弦楽団がないので、ピアノコンツェルトにピアノが協演すると言う事になり、聞いていてもソロピアノの音がどちらのピアノから出ているのかわからないという様なことも記憶にある。昨今の音楽コンクールの入選者を聞いていると隔世の感がある。恐らく落選した人でも当時のレベルと比較すれば堂々たる一流の演奏者だと言えよう。

大学の管弦楽団も一応の形を整え、海軍の瀬戸口藤吉氏を指揮者に迎えて練習を始めたのは大正11年頃である。部分練習で瀬戸口氏が余り強く直したり注文するので怒って退席したホルンもあったことを思出す。

大学の管弦楽団は部員は合奏の楽しみはもちろんであるが、音楽理論、和声、音楽史等に興味を持っている者が多く、単に合奏を楽しむのみならず曲の解釈、構成、形式等を議論したりしたものである。当時音楽学校教師クーン氏とベートーベンのヴァイオリン協奏曲を協演したのもこの頃である。これは恐らく本邦で始めてのことであろう。そして遂にベートーベンの第4交響曲の本邦初演をやったのである。会場は所もあろうに上野の音楽学校の講堂であった事もその意気軒昂たる所を示すものと思う。指揮者も先輩遠藤宏氏となった。同氏は文学部で音楽美学専攻の士で氏の学位論文は五線紙の連続で審査の教授も閉口したとか聞いている。この様な指揮者なので曲目の選定も腕前より理論的になり次第に珍しいものを選んだ。

遠藤氏と云えばこの頃忘れてならない人がいる。それは徳川頼貞侯で、徳川御三家の1人でその道楽の1つに音楽があり、南葵文庫を作り当時他に無いパイプオルガンを備えたホールを有する会館を作り、その所蔵図書にはあらゆる譜面―管弦楽用、オペラ用等を備えていたものである。大学の音楽部もこれを使って演奏したことも再三あった。実用の譜面のみならずその他貴重な参考品もあった筈で戦災後如何なつたであろうか。焼けたり散逸しているのなら甚だ惜しいこと残念なことである。

演奏会の曲も管楽器の不足から当然クラシックのものが多くなり、リムスキーコルサコフ、ストラヴィンスキ

一等の曲は手が出なかった。先日大学の演奏会を久しぶりに聞いてその編成といい、その人数といい、その演奏といい、よく難曲をまとめていることにひどく感心したと同時に、音楽のレベルの上った事をつくづく感じた次第である。

又、私の頃、大学には毎年秋、10月の中旬にスポーツウィークと称する1週間を設け、東大・京大の運動部各々が東京と京都に交互に遠征して技を競い懇親を深める行事があったが、その最終日には両大学の管弦楽団が合同演奏会を開くのが常であった。世間の音楽レベルが前記の様な時代とて、これも仲々有名な行事であった。大正15年の秋には私も京都で行われた音楽会のコンサートマスターを勤め、JOBKのメッテル氏指揮の下にシューベルトの未完成交響曲、エグモント序曲等を演奏したのは私の一生の想出の一つである。

要するに吾々の時代——50年前の我国の音楽界の黎明期、幼年期であったことをつくづく感じるものである。

(昭和軸受KK)

## 思 い 出

昭14理, 18文卒 Vc 柴田南雄

思い出などというものは、当人以外にはいっこう面白くないものですが、50年史ということなので少し書いてみます。

じつは、われわれが東大オケラに入った頃、先輩の人たちからベートーヴェンの「第4」と何と何とはこのオーケストラが本邦初演したのだとさかんに聞かされ、したがってわれわれの前にすでに数十年の歴史があったような気がしていたのに、今やっと50年と聞いてすこし意外の感がしないでもありません。私が音楽部に入ったのは昭和12年(1937年)の春のことで正門のそばで安藤晶君(VI, 法15)にバッタリ会うなり「君を引っぱることに決めてるんだよ」とかたんに誘い込まれ、その場にいた繁田裕司(三木鶏郎, Timp. VI, 法15)や宇治豊紀(VId, 法14)の諸君とたちまち友達になったのを昨日のこのように憶えています。ちょうどその1年くらい前に、永年オケラの指揮者だった遠藤宏氏(上野音楽学校の音楽史教授, 上野でブラスバンドの指揮者でもあった)からバトンが長井維理氏(化学者)に渡されたすぐあとの時期で、これは大げさにいうと一種のクーデターみたいなものだったらしく、一部の先輩の方々はこのことで御不快な思いをされたのじゃないか、と音楽部に入った

当時薄々感じたものです。

昭和12年の夏休みには7月に前記の4人と諏訪湖の近くの山の中の旅館にクワルテットをやりに行き、BeethovenのOp. 135の“Der schwer gefasste Entschluss”のフォルティシモをあんまり何度も練習してとなりの部屋からドナられたり、8月はブラスバンド(世界教育会議のレセプション。理学部2号館の奥の前田記念懐徳館でやった)をやりに暑い中を連日本郷まで通ったりしたものです。レセプションの曲目に、当時の長与又郎総長のお嬢さんの姪御さんで上野の作曲科を卒業された長与恵美子さんという方の可憐なマーチと、ヒンデミットに師事して帰朝した上野の作曲教官下総皖一氏(のちの東京芸術大学音楽部長)の長い長いマーチが含まれていました。下総氏の曲はしらべてみるとABA BAB……CDCDCD……ABAB……という具合にえんえんとつづくので、私たちが勝手に、その素材で簡潔な3部形式にアレンジして練習していると、いつの間にか下総氏が現われてじっと聞いていたのにはおどろきました。そういう時の長井さんはまことに潤達なもので、わざと下総氏に聞こえるような大声で「ナァみんなこりゃちと長いから、俺達にもできるような形でやろうやナァ」と先手を打ち、氏もあきらめていつの間にか帰ってしまわれました。長井さんは生まれながらのドイツ音楽魂と人間的魅力、そして終生独身でおられたためもあって学生とトコトンまでつき合って下さるので、その人気たるや絶大でした。遠藤、下総、長井の諸氏いずれも故人となられました。

たぶん昭和18年9月下旬に、安田講堂で行なわれた卒業式(戦争末期は半年くり上げ卒業)の時ではなかったかと思いますが、時の東条首相、橋田文相以下諸将星高官が来学し、出陣学徒へのはなむけの辞が述べられました。その時入野君たちと小編成の合奏で「君が代」などを二階のギャラリーで奏いたのを憶えています。東条首相がおとくいの古歌を引用するのに、かんじんの所でトチったりしていつもの調子が出ず、やはり東大での演説は場ちがいがいい感じでした。

戦後、私は不幸にして音楽を職業とするようになり、アマチュアの花園にノコノコ出掛けていくことは自戒して遠慮していましたが、数年前に早川さんの棒でラヴェルを聞かせて貰い(東京地区国公立大学オケの競演会のような折に安田講堂で)、じつにうまいのに驚き、少しますぎるんじゃないかと思ったり、ナニ東大生だから当たり前だろうと思ひ直したりしました。

(作曲家, 芸大講師)

## オケを卒業して

昭29工卒 Vn 桜井照夫

時々東大オーケストラの便りに接するのは、なつかしくもあり嬉しいものである。(寄付を求められるとギンとするのであるが)私は在学当時3年にわたってオーケストラに在籍したが、ヴァイオリンを奏くだけで極めておとなしくしていたら、印象は弱かったに違いない。しかし今から考えてみて、音楽を知り多少とも音楽活動をやったことは、実によい経験だったと思っている。職業をもっと学生に比べて余暇はずっと少なくなるため、会社における音楽活動は学校に比べて通常ずっと低調である。学校を出てから2、3年の頃、会社へヴァイオリンを時々持って来て、簡単な合奏(二重奏かピアノと合わせる程度)をしたが、楽器をぶら下げて来ても大部分の人は知らん顔をしている。これが学校だったら、大勢につきまわられて何か奏けとせがまれたものだが。

会社で研究をずっと続けて来たおかげで、ものを書くことは得意になり、社内誌などで時々雑文を書いている。「音楽通」らしい所を見せている。(あまりわかる人がいないので幸いである)音楽とは実践であり、実演に接することである等と主張しながら、あまり楽器の音も出せぬ社宅住いであり、またテレビやステレオで音楽を十分楽しめる世の中となつて、実践からは心ならずも遠ざかっている。ただし7才のわが子には、まずピアノをたたくことよりも耳から音楽に親しませることをと考へ、レコード等で遠大な教育をやっている。教育ママ・音楽ママのおしつけ教育では情操は育成されず、ポピュラー音楽とアブストラクト音楽の栄える現代の日本を作ったと信じているからである。この今の世の中で、労の多いクラシック音楽の活動に従うのも、東大なればこそと思ひ、今後の一層の発展を願うのである。

(日立製作所中央研究所)

## 早川さんのことなど

昭36文卒 Vn 船橋経治

昭和32年、私が安田講堂で聞いた入学式での奏楽がオケラとのなれそめでした。その時は山本力さんの指揮でたしかリストの前奏曲かなんかを鳴らしたと思いますが

入学前からオケラに入団する事を唯一の楽しみにしていた私の耳には非常に印象的で、今でもあの時の音がありありと思ひだされます。今から考えると随分酷い音でしたが、なにしろそれまでオーケストラの音をその時ほど近くで聞いた事がなかったので、まああんなものかなと思ひていました。

私の在学中の練習所は、今はなんと呼ぶか知りませんが、安田講堂の裏手の学生会館の三階の楽器倉庫のついた広い部屋でした。その昔岩崎家から寄贈されたというスタインウェイのフルコンが部屋のかなりのスペースを占めていましたが、それでも定期演奏会のゲネプロでもないかぎり部員が入り切れないという事は無かったように思ひます。定期の時の人員は昭和33年の時の第一バイオリンが5プルート位、36年の時でも7プルートあったかどうかでした。

昭和34年に指揮者が山本力氏から早川正昭氏に交代しましたが、その前から早川氏は先輩として、なにかにつけて、トラに駆けつけてくれていました。氏の主なパートはホルンで、唇の横っちょにマウスピースをあてがいたンギングする度に頬が風船のようにふくらむという特徴ある奏法ながら実に見事なプレイ振りでした。それよりも我々が驚いたのは練習にホルンをかっついて来ても、たまたまベース奏者が欠席していると(当時、いつも練習に出席していたベース奏者は中島信男君1人)すぐベースのパートをひき受け、休憩時間には我々からバイオリンを借り受けるや否やメンデルスゾーンの協奏曲の一節をあれよ、あれよと弾き切り、オーボエの金山君にはオーボエの運指法を教へて上げるといった具合、早川氏の両国高校の後輩だったヴィオラの吉村さんに聞くと早川氏の弾けないのはハーブだけだとの事、一つの楽器すら満足に扱えない我々はただあけにとられるばかりでした。その後早川氏が結婚され、相手の女性がハーブ奏者と聞き、心中何か納得のいくものを感じたものでした。

早川氏を語る時、すぐ頭に浮ぶことが2つあります。ひとつは氏が、私の記憶するかぎり練習に一度も遅刻しなかったことです。新らしく指揮者に就任された最初の練習の時、練習時間を守る事を厳しく申し渡され、とはいうもののオケのメンバーにはあいかわらず遅刻の常習者が絶えなかったにもかかわらず、自身では厳しくこれを守り通されたようです。

もう1つは昭和35年の東北地方演奏旅行の折だったと思いますが、旅行の日程も中端を過ぎた為かメンバーの気も軽くなり、ステージで人がミスをするとニヤニヤ笑ったり、楽屋で騒いだりした事がありました。その晩、

宿舎に帰ると氏はすぐ反省会を招集しステージマナーについて話されました。その中で、作曲家というものは、極く僅かのモチーフを何回も手を変えて繰り返して1つの作品を作るもので、したがって、演奏というものはこのモチーフを客に飽きさせずに何回聞かせられるかが指揮者の、演奏者の腕の振る所である。しかるに、いくら練習熱心とはいいいながら、演奏会が始まる前から楽座でプカプカ吹かれたのでは客席に筒抜けで実も蓋もない、といわれました。団員一同も反省の色濃く、そのせいか、残りの日程を無事消化することができました。

演奏旅行といえ私の入学した昭和32年に久し振りに再開され毎年委員は忙しいことでしたが、私も昭和34年の九州演奏旅行をまとめました。当時、部員と先輩だけではどうしてもパートが足らず、少なくとも毎年5〜6人のトラを国立音楽大学などから頼みましたし、ギャラも宿泊費の他は一夜の演奏会で5万円ももらえませんでしたので、常に赤字でした。結局運賃は自己負担ということになっていたと思います。

昭和35年の中部地方演奏旅行の時は6月17日、岡谷市に始まるスケジュールでしたが、6月15日に樺美智子さんがなくなり、この演奏旅行のゲネプロで演奏旅行をとりやめるべきか、一度契約をかわした以上不本意でも出発すべきかについて討論がなされました。結局商業道德派が勝ち、出発したもののその演奏会第一夜で主催者側の来賓が、たしか岡谷市長だったと思いますが、「東京ではデモだストだと学業を放棄して騒いでいる学生もいるようであるが、一方、このように文化活動を行なっている学生もいることは大変心強い」と挨拶したのでおさまらずファゴットの牛島和夫君が立ってやりかえし、そのあとの飯田市と中津川市の演奏会の前には牛島君が安保についてのオーケストラのメッセージを述べてから演奏会に入ったものです。(TBS)

## 昭和39年から41年までの 東大オーケストラとその 周辺と余談

昭42 法卒 Vc 太田 雅 夫

私は37年4月から42年3月まで5年間東大オーケストラと法学部に在籍した。いまから思えば60年安保と70年安保の中間であり、学生運動にも革マルに対する心情関心があったばかりで、求めることをしなかったから外部環境から悩みを強制されることもなかった。

ただオリンピックだけがテレビにかじりついた印象としてあるだけであり、今会社に勤めて諸統計を見てはじめて、日本経済から見ると、この時代は現在のGNP第2位になる高度成長前の不況時代であつたらしいとわかった。そうすれば45年史の時の募金の集まり具合の悪さになるほどとうなずける。

だから私の在籍した時代のオケ一少くとも私一には安保もなく大学紛争もなかった。

だから、東大紛争で中味がどう変ったか私は知らないが、大学改革などない方がよいと半分本気で考えている。勉強しなかったことに悔いは残るが、まじめに講義などに出ていたら、オケに対して今以上の悔いを残すことになっただろうから。

さて前置きはこのくらいにして本論に入るが、私が責任をもって書けるのは39年以降であるので、あらかじめ断っておく。話が多方面にわたるので時期的には前後するが主題別にまとめる。

### 「東大オーケストラ45年史」 昭和39年

私が39年度の総務を引受けことになったのは前の年38年10月の駒場合宿(於検見川)である。8月の野尻湖の合宿で穴戸が自分は教養に残るので総務はできないからお前がやれと推めてきたので、その気になって立候補したのである。その前から本郷は3年する気でいたがこれで留年は決定的になったと思った。訪欧旅行の話がもちあがったからでも、単位がとれなかったからでもない。

私の学年の任務はその年大きくいって2つあった。1つは演奏旅行(中部・四国)であり、1つは45年史であった。演奏旅行は前年の榊田さんの学年からのひきつぎで全て自主公演でした方がもうかるというので、皆相当張切っており、地方に交渉に行くという魅力もあったらしいが、私は東京にいて部内をまとめるという名のもとにチケット、チラシの印刷関係だけを受持った。結果的には収益面では大成功で、78万円という空前絶後の現金が手にはいり、この資金が45年史、記念演奏会等を可能にしたのである。

45年史編集の仕事は39年2月にはじまった。部内では現在運営委員と称している会にはかり、菱沼、原、太中(現原夫人)と私が担当することになった。

まず名簿作りから始めることになったが、35年史以降を含めて田中宏(39Vn)さんが先輩名簿を作成し続けて下さっていたので、まがりなりにもその第1信を発送することができた。しかしこの差戻りがものすごく、結局約600人中300人以上が消息不明ということになった。

この不明者をさっそくリストアップして「行方不明者

リスト」なるものを刷り、さっそく第2信ということになるのであるが、人さがしについてはOBの方からの連絡によるものが7割以上であるが、勤務先等ちょっとした手がかりによる「東大人名録」が一番役立った。

学会名簿は半数位加入していないらしくあまりみつからなかった。学級別の卒業生名簿も医、理などはかなりくわしいのがあった。電話帳で同姓（持主でない場合もあるので同名までいかない）の人を1人について10軒くらい電話してみつけた人も10人位いた。同期の人にきいてもこんな人がいたかなと首をかしげる人もあり、学外者で常トラどころか団員以上の活躍をした人あり、どこまでをOBとみとめるか判定はなかなかむづかしかった。45年史では学外者はのせなかったが、今考えてみればOBは多いほど便利だから皆のせればよかったと思っている。自分はオケとは関係なく入部募集のをぞいてみただけだがあまり頻繁に手紙がきてうるさい、2000円出すから今後名簿から抹殺せよという人もいれば、あまり関係なかったが、こうやって学生さんに先輩とってたずねてこられるのはうれしい、という人もありむづかしい。ともあれ、上の2者ともに、また50年史の手紙が行くわけである。

オケ史に関しては同期の親睦を兼ねて、45年を7期にわけ、活動記録、同期名簿等を印刷資料とし、毎週土曜日に赤門の学士会館にお集りいただき、情報収集につとめた。これは良い企画だったと今でも思っているが、主催者側は大変だった。手紙一本、会合通知を出しただけで来て下さるばかりでないから、ほとんど毎晩次回会合の出席者集めの電話で電話恐怖症にかかってしまった。私の家の電話代が6000円を越える月が6、7、8月と3カ月続いた。大正から昭和の初年にかけての方と昭和30年以降の方は相当数集まってくださった。その中間の方々は現在、社会の最前線で主要な地位についておられ、多忙な生活を送られているためだろうと思われた。

この間、戸別訪問は手が足りなくてあまりできなかったがそれでもいろいろな方のお世話になり、資料の提供をうけた。

齊藤武夫氏（大14年卒）からは自分もっていてもしようがないからと創立当初の写真10余枚をいただいた。国沢新太郎氏（大15年卒）からは珍しい木管合奏の室内楽譜ばかり厚さにして20~30cmもいただいた。三浦義文氏（昭5年卒）には昭和初年までのプログラムのコピーを大量にいただいた。山崎広氏（大12年卒）からはベートーベン祭（大11年）迄の創立当初のことを数年前にまとめてタイプしたものがお借りしていたが、お返しする間もなく逝去された。三木トリロー氏（昭和15年卒）

伊藤隆太氏（昭21年卒）、矢追秀武氏（大9年卒、45.10.逝去）坂本吉勝氏（昭7年卒）、菅野拓三氏（大14年卒）等の方々にも貴重な話をうかがった。

こうしてできあがった45年史ではあるが、歴史的な史料としては35年史の精度を相当改善したという自信はあまりない。ただ、その裏付となるプログラム、写真等を集め集大成し得たというばかりである。

創立当初のことなど極端に言えば聞く人ごとにちがっていて、証拠のない話であるから、どれが本当ときめることはできないし、記録でわからないことはどなたに聞いてもわからないのである。かける労力とその価値との見合いで考えるならば、これらの不確かな事の実状をつきとめるのは不可能だし、無意味とも考えられる。

印刷原稿は9月初に一部出しはじめた。しかしこれは校正などといったものでなく、これを原稿にしての追加訂正の連続で印刷の面倒を一切引受けて下さった小山康三氏にはお礼の言葉もない。

#### オケ連の話

昭和39年の五月祭の練習に、ひょっこり名古屋大学オケの幹部がたずねてきた。名古屋は東京と大阪の間にありながら、通路になるばかりで指導的な音楽家がいず、文化の不毛地帯である、というのがオーケストラ連盟への根本動機であった。7月の北大、名大、京大等との事前打合せを経、駒場の同窓会館で8月、初期加盟大学で、熱っぽい議論の後全国大学オーケストラ連盟が発足し、東大が事務局と事務局長をひき受けることになった。

その活動はブロック活動と機関誌「ANDANTE」（年1回当番校が発行、名前は、“歩く速さで着実に”という意味で私がつけた）を基本とし、年1回8月頃に合宿と称して全国から百数十名のオケマンをあつめ、練習のみの合同オーケストラ、講演会、討論会等を行う。

この基本活動は7年たった今でもあまり変わらずに続いているようで、ブロックの合同演奏会等も盛んになってきている。現在では加盟80大学に及び、今年の小豆島の合宿にはN響のトッププレーヤーを招くなど、着実にその成果をあげているようである。

大学オケには、規模の差、地域の特質にしたがって、俗に言われる均一化された学生像でなく、それぞれの活動上の特色があって非常におもしろい。私自身としてもオケ連時代の交友関係がまだ続いているものもあるからゆかいである。しかし、数年前と較べて各大学とも弦楽器奏者の不足に端を発するメンバー不足と大学紛争による活動の沈滞化で実力、規模ともおちているといわれている。

現在のオケ連に望まれるのは、メンバーの獲得と、大学や社会に対する働きかけ、宣伝力、組織力、活動力であろう。

#### 訪欧旅行の話

1966年の訪欧演奏旅行については、52回定期の訪欧記念特集の“響”（第9号）に詳しい話と記録があるので省略させて頂くとして、その後の評価について若干のべてみたい。

現在の大学院1年生がころうじて訪欧旅行の時の1年生である程時間がたってしまったが、彼等によれば、当時は技術レベルも高くオケ気遣いも多く、ハードトレーニングの連続で組織的にも、活動上も充実していたということになるらしいが、とてもそんなものではなかったのである。

たしかに忙しかったにはちがいないが、生れて初めて海外へ行けるという魅力に、オケ活動の本質云々、学業とサークル云々の議論が勝てずにひっぱられていたにすぎない。

だから今にして考えてみれば、私達の態度自体も物見遊山、なんでも見てやろう、とは程遠く、演奏にも旅行にも徹しきれないあいまいなものとならざるを得なかった。

松田先生がせっかく与えてくださった絶好の機会を私達は生かしきれなかったという後悔の念が先に立つ。

だからといって、行くべきでなかったということではなく、確かに私達のオーケストラ活動上、学生生活上の一つの転機になっており、ある種の自信を形づけている。

以後、ヨーロッパにオケの人が留学する話が多く、現在でもかつてのオケ部員3～4人は海外にいるはずである。

もし次に又海外に出られる機会がオケにあったら、その時は存分にそのチャンスを生かし、いろんなことをしてきてもらいたいと思うのである。

#### その他

◇部屋のピンク電話について……訪欧旅行の準備期間中不便を感じたので学生課の藤波さんをお願いした所、施設部の電話室長のところへ幾度となく足を運んでくれ、関西演奏旅行中の7月20日、とりつけられた。その後他団体の無断使用が多くて料金がかさみすぎるので、ピンク電話になったが、10円玉のたまる所が焼き破られてしまい、人心の荒廃ぶりは目をおおろ。

◇楽器購入費について……卒業式と入学式の奏楽をする

ことが大きな武器となって、毎年楽器の修理費と称して10万円位大学から出してもらっていたが、40年暮に学生課の堀津さん（藤波さんの前任者）と相談して、横手さん（37年楽器係）以来やっていなかった申請を、あまりあてにせず文部省にしたところ、思いがけずも7割くらいが認められて総額200万円位の予算が41年から3年間にわたっておりることになり、ティンパニー、コントラファゴット、オーボエ、バストロンボーン、ファゴットなどが買えることになり、東大は、立教、中央につく楽器もちということになっている。しかし、先日7月の盗難で、オーボエ、コールアングレ、ファゴットなどがなくなり誠に残念である。

#### ◇「チェロ奏法」の翻訳出版

ディラン・アレクザニアンという仏人の大著を、チェロ族が分担して対訳の英語から翻訳して半分だけタイプオフセットで自費印刷出版した。39年頃から始めていたのがなかなか進まず、最後は古川先輩（40年卒）が訳を私が割付、編集を担当して卒業する42年3月迄正門前の「ボンナ」で朝から閉店までねばって仕事をした。それでも間に合わず入社しても徹夜で続け5月の末になってやっと印刷ができあがった。古川氏と私のオケに対する卒業論文みたいなものである。これは200部印刷で上下巻とも予約金をとって上巻しか発行していないから、チェロの後輩諸氏には、なんとか下巻を完成してもらいたいと思っている。今でも九州の方の大学からこの本に関して問合せがあるそうである。

最近では、名誉指揮者の早川先生と現役の桂君（F14年）の共訳によるヴィヴァルディの研究書が音楽之友社から出版されているが、部員の中には優秀な人も多いので、演奏だけでなく、こういった方面でも活躍できる余地がまだまだ残されていると思うのだが。

#### アマチュアオーケストラ及び卒業後の音楽活動について

東大オーケストラが50年の星霜を経て、現在が、第二次大戦の時に次ぐピンチにあるように、何かを続けて絶やさないという事はその時、その時に大変な努力がいるものである。

同時に、個人の側から見れば、いまの現役の何パーセントが、卒業後も音楽活動を続けるか、卒業した人の何パーセントが現に続けているか疑問に思わざるを得ない。

東大オーケストラは一部の学生運動家のような青春のエネルギーのはけ口だけであってもらいたくない。

この意味でオケの50周年は過去の追憶にふけるのでな

く、この行事の中から、音楽から遠ざかっていた人はまた近づきになるきっかけを作り、今続けている人は、この楽しさをさらに続けて行こうという動機づけをつかんでゆけるようになってほしいと思う。過去がどうであったかということではなく、今、これからどうするかということが問題になるべきであろう。

私事にわたるが、私は現在ある社会人のアマチュアオーケストラの団員であり、その運営にたずさわっている。団員は皆、大学オケの出身者かと思うとそうでなくせいぜい3分の2位のものである。卒業してから入団してくる人は少いのである。このことは、オーケストラをすることが音楽の全てではないにしても、会社というものが卒業時の学生さんの心をいかに占めているかを裏書きするもので、会社が忙しいのを理由に週にたった一度の練習の拘束をも拒否するのである。

そうしているうちに、音楽会に行くのも、つい面倒になり、楽器にさわるはおろか、レコードさえもきかなくなってしまう。

現役部員以外の人にとっての東大オーケストラの存在意義は、OBはその活動を報告し、演奏会をききに來てもらい、又仲間になって音楽の若々しい感動をその胸に呼びさましてくれることにある。

だから、東大オーケストラはもっと事務処理ルートを確実にし、1人でも行方不明にならないよう追いかけて、寄付を沢山とって、現役とOBの間に切りたくても切れないくされ縁を沢山つくってもらいたいと思うのである。

(日産自動車勤務)

## 感 想

昭40入 Fg 山 根 秀 樹

私はいま、卒業論文の準備で広げた諸橋の漢和辞典だの、世界地図だの、ノートの切れ端だのを机の隅に押しやっけて、オーケストラ回想記の原稿用紙に向っているのだが、「回想記」を書こうとして、東大オーケストラのことは一向に回想されず、音楽そのもの、音そのものそして音楽の形而上学めいたものが、私の現在の関心と絡みあって、心のどこかにわだかまっているのである。

音楽が私の指南役である、と今こたわりなく言うことができる。しかも、多分最後まで追越すことのできない指南役。私は、中国古代史を勉強している学生であるが歴史は言葉である。あるいは歴史は文体であるという単純な真理を教えてくれたのは、音楽であった。歴史が文

体である、ということには二重の意味がある。過去に無限の事実があって、それが歴史であるという観念は一般的なものであるが、よく考えてみると、ものの影のようにつかみ所がない。楠木正成が生きて戦争をしていたという証拠はどこにもないので、太平記や神皇正統記に書かれた言葉だけが絶対に疑えないものである。それならば言葉こそ歴史であると言えないだろうか。又、文体のもつ香りだけが歴史認識のただ一つの手掛りではないだろうか。

一方、私が歴史を勉強し記述するとは、残された言葉を読み、眺めて、何か書くという営みである——これが今一つの意味である。

これは一種のニヒリズムである。青空のようにぼかんとした明るいニヒリズムである。だが、このニヒリズムは、音楽の本質そのものではないだろうか。実は、私は、音楽のニヒリズムから私流の歴史学の第一方法論を学んだのである。

音楽には音しかないこと、しかもこの音を扱っては、自分をも他人をも購着することができない。ちょっと待ってくれ、と手を挙げることもできない。自分はバッハが良くわかる。といっても、演奏する以上立派な音を出さなければなるまい。素裸で人前に出るようなものだ。肉体が美しくなければかなうまい。

この単純な事実に気付いてからは、ファゴットを吹くのが苦痛で堪らなくなった。しかも私のファゴットが木管パートの癌だったようで——この、だったようだが、下手な人間の一般的な指標なので、彼れには自分の出している音を対象化することができないのである——情ないやらくやしいやらで、4年間やったところでオケは卒業させてもらった。(というのも、学業の方は、まだ終えていなかったからなのだが。)弱音を吐くのも男らしくないから、まあしっかりやり給えなどと先輩風を吹かせながらニコニコと笑ってやめたのであった。もっと練習すればとも考えられたが、練習とはもともと、自分の生活を組織化して利用して悔いのない対象にふり向けられるものであり、私の職業は音楽ではないし、と思ったのである。

そこで、私は自分の職業に戻っていった。この職業という言葉は、トーマス・マンから学んだのであるが、私の職業は歴史学なのである。ところがこの職場に帰ってみるとその素材があまりに粗末に、無自覚に使われているので私はびっくりしてしまった。歴史認識に対するペシミズム、言葉の無力性をほとんど感じていないようだった。だから言葉が濫用されて、気の遠くなるようなおしゃべりが続くのである。アマチュアのオーケストラで



さえ、音の恐しさを知って、ある程度、音を大切に  
する努力はされているのだ。

職業には、それが最初で最後であるようなもの(実体)  
がある。音楽は音、文学は言葉、プロ野球の選手は、技  
と力というように。歴史学で動かさないものは何か。言  
葉であろう。哲学でも同じこと。けれど多くの人は、言  
葉は手段だと考えている。そして手段より内容とか言っ  
ている。

歴史学も哲学も最後は、言語作品であろう。そこ  
には、文学とは違った方法論と論理があるに違いないが、  
言葉によって自然を創ろうという不遜な営みであること  
に変わりはない。自らの干涸びた営みの証しを、やりもし  
ない「実践」に求めている人間も大勢いて、果しのない  
おしゃべりをしている。書けなければ、書かないという  
胆玉が彼らにはないようだ。彼らには、魔笛の音楽を聴  
かせると良いかもしれない。パミーナの美しさと、パパ  
ゲーナの愛らしさと、ザラストロの清浄、それに、モ  
ーツァルトの音楽を得るためには、沈黙の業を課せられる  
と筋書きがちゃんとそうできている。

私は、オーケストラで楽器を鳴らした甲斐が少しはあ  
ったかなと思った。しかし、余計なことを知ってしまった  
とも考える。音楽家が音を扱うように、言葉を扱えとい  
うのは、我ながら大した覚悟だと思うが、どうも覚悟  
負けになりそうである。私の目の前に卒業論文準備のノ  
ートなどが散らばっている。主題は「中国北朝内におけ  
るトルコ系諸氏族」というのである。中国の社会には、  
青い眼のトルコ人をも知らぬ間に中国化してしまう粘液  
のようなものがあるのか、などと考えている。だが、作  
品にはなるまい。ただ、おしゃべりだけは慎しもうと心  
掛けている。

言葉を素材とした営みで、音楽の禁欲と取替可能性  
を獲得しているのは、森鷗外と小林秀雄であろう。鷗外  
は無意識に、小林は意識して。小林など音楽のこの性質  
を熟知していたから、どうにでもしやがれといったニヒ  
リズムと一体となった豊饒な歌がその文体から聞えてく  
る。余分な音やいらいらするリズムの狂いがない。

回想記を書けといわれると、こんなことしか書けな  
い。ついでだからもう一つ書く。ドイツ演奏旅行前の妙  
高合宿でだったと思うが、早川先生が指揮台から、リズ  
ムというのは、何ものかを区分したのでなく、1つ1つ  
の音が対等に関係を結んででき上るものだとおっしゃた  
ことがあった。いずれ、主体性論の1つだと思って聞き流  
していたが、最近、ベームのフィガロの結婚(新盤)  
を聴いて、これかと思った。リズムが通常の時間とは別  
次元なのである。音楽が、澎湃と新鮮に流れていた。ベ

ームの体内にいつも新鮮なものが流れていて、棒を振る  
と、先からいくらでも出てくる。だから彼のアインザツ  
は誰よりも新鮮なのである。私は、ここでベルグソンの  
純粹持続を思い出した。これはベルグソンにとって一  
種の救いの概念だと思うが、ともかくベームとベルグソ  
ンに奇妙な一致を発見したのである。音楽的時間が通常  
の時間(曖昧な言い方だが)と次元が異なることなど、音  
楽家にとってあたり前のことなのだろうが、私には新鮮  
な驚きであった。早川先生も多分このことをおっしゃっ  
たのであろう。先生のこの音楽観は、昭和45年の定期の  
モーツァルト交響曲29番に最も純粹に実現していた。そ  
こには音楽的な時間があった。これを私が知っている限  
りでの東大オーケストラの最名演と考える所以がここに  
ある。

一方、ベームは、もう80代のなかばを過ぎるのだが、  
新しい録音ほど私は好きだ。音楽がより単純に、より新  
鮮に、より明るくなっていく。ベーム自身が若くなって  
いく。音楽が若返らせるのか。若返り法としては、社会  
革命より音楽の方を、私は信用している。

私は、オーケストラは、4年間で卒業したが、学業の  
方はまだ終了していない。オケを離れて1年半以上たっ  
た。都合の良いことに、オケでのこまごまとしたでき事  
は皆忘れてしまった。オケでは、音楽以外のことは何も  
学ばなかった。それで、文句はないと思う。ただ、演奏  
そのものと、その準備となる厄介なムスケルや態度決定  
があって、後者はちっとも面白いものではないが、黙っ  
て片付けなければならぬものだとの覚悟はできていた。  
それを、「オケは政治的に運営されねばならない」など  
と下手に気取って書いたものだから、誤解された面もあ  
ったが、主旨そのものは間違っていないと今でも思っ  
ている。

私の今の考えは、アマチュアリズム一般にかなり懐疑  
的である。皆自分の職業(学業を含めて)に専心するの  
が良いと思っている。これから先は、自分の職業以外に  
時間をとるまいと思っている。ただし大学オケが無意味  
だなどとは決して考えない。全国にうようよある大学オ  
ケの存在がそれを証明している。毎年々々、同じ問題を  
蒸し返しながらか、決して潰れない。私は、その問題が一  
つ一つ解決されようとは想像していない。むしろオケに  
活力を与えるものだと考えられないこともない。

音楽的環境が貧しく音楽的に無知だが、ベートーヴェ  
ンの交響曲に憧れ、オーケストラに憧れている多くの高  
校生の存在を私は知っている。彼らが大学生になりオー  
ケストラに入ればその憧れと無知が大学オーケストラを  
支えるのである。私もその一員であったから良く知って

いる。そして、そのような高校生が絶えない限り、大学オーケストラは、決してなくなるはない。

(文学部在学中)

## 1968年東大オケ騒動記

昭41入 Vn 南 条 洋 雄

1968年度は東大オケにとってかってない試練の年であった。そして東京大学そのものにおいて、学問の本質が問われ帝国大学以来の大学秩序が根底から崩壊されんとする危機的状況を迎えた年でもあった。オケの基盤たる大学自体のこうした事態は多分に部内に反映されていた。

一方こうした状況の中にあって、常任指揮者早川正昭氏の突然の辞任のいう事件によってにわかにおケ内部に危機感が高まってくる。当時の執行部はその中で、オケの体質改善、その為の具体的解決策としてのオケ改革を手がけ急速に進展しつつある学内情勢の中で、困難を極めながらも、遂にあの劇的な1969年1月19日、第54回定期演奏会開催を押し切ってしまった。

この間のオケ活動に対する評価は様々であろうし、今ここでどう評価すべきものでもなかろう。とにかく後味の悪い幕切れとなった。私は幸か不幸か1969年度東大オケ総務という立場で、激動の1年間をおケに打込んできた。そこで、客観的資料とは別に、私なりに1968年を追っていく中で、いくつかの問題点を述べてみたい。

1967年秋の合宿において、当時の習慣に従って2年生総会の席で68年度の執行部の顔ぶれが決定した。この時点での執行部の方向性は、訪独演奏旅行以後の演奏技術の低下にいかに対処するかという点と、部の運営の合理化という二点に向けられていたように思われる。結果的にみて、執行部体制は近年になく強力であったし、年間活動も66年度の訪独旅行を別とすれば、多様性に富み、かつ大規模なものであった。したがって、オーケストラ史的にみれば、1968年度というのは、旧体質の最高度に完成された年であったといっても過言ではなかろう。したがって、67年秋の新執行部結成と同時に、外務を中心として翌夏の演奏旅行(東北地方9都市)に向けてもっぱらその成功を夢見て活動が開始されていったのであった。

このような我々新執行部にとって最初の試練は3月の卒業式と4月の入学式演奏をひかえてやってきた。1968年初頭より、医学部を中心とする東大闘争萌芽期にあっ

て卒業式粉碎の動きの中で、オーケストラにあっては、こうした状況の中での卒業式演奏は如何なる意味をもつかという疑問に対して、執行部はもとより一般部員は当惑するのみであった。卒業式、入学式演奏は我々にとって自らの入学式以来、やるのが当然なものとしてしかなく、当時のオケの意識水準からは、如何に楽器を安全に講堂に運び込むか、メンバーが確保できるか等の対策に追われる始末であった。結局卒業式は中止され、つづいて入学式の時は、多数の入学式開催を望む新入生に対して心からの祝意を表すために演奏を行うという統一見解をもって部の決定とした。当日は、粉碎の叫びの中で扉を締め切り、教授連が身を呈して扉を押さえるという異様な状況の中で、複雑な心境の内に演奏を行ったのであった。

その後、一応平静の内に新入生受入、5月祭演奏とスケジュールを消化していく中で、東大闘争は医学部闘争から全学的闘争へと拡大していった。オケにあっては大詰めを迎えた演奏旅行に向けて練習を続けていく過程で今一つの盛り上がり欠けていた。すなわち部員の一部分に、闘争参加による慢性的欠席、遅刻が目立つようになり、休部者が数名出てきた。他の部員についても個人練習の不足が目立ち、闘争参加という至上命令のために、オケ部員としての自覚、演奏旅行という対社会的責任感の欠如が著しくなってきた。当時の執行部としては、こうした現象に対して深く東大闘争とオーケストラとの関係を考える以前に、事務レベルでどうにも後に引けない所まで来てしまっていた演奏旅行を何とか成功させるための方策で頭がいっぱいであった、ということは無理からぬことであらう。この旅行は経済的には大成功を治め、最大規模の旅行活動をもりたてた訳ではあるが、その旅行中に幾度となく慢性化したオケ活動に対して様々な問いかけがなされた。

一方、演奏面ではプログラム編成が効果的であったせいもあって概して好評ではあったが、かつての訪独当時のレベルからは、大きく低下していた事は事実であったし、何よりも音楽に対する情熱の持ち方がかなり古き良き時代の東大オケマン連とは違って来ていることなどが指摘されていた。そうした中で最後の訪問地、弘前でのリハーサルを終えた瞬間早川正昭先生から突然その演奏をもって東大オケをお辞めになるとの説明があり、余りの突然のことに一同茫然としたのであった。なす術もなく開演時間を迎え、いつもの通りのにこやかな表情で先生は指揮棒を振り始めたのであるが、それが最後の棒と思ったとたん、何ともいえず胸がいっぱいになり、ベートーベンの第七交響曲の二楽章では涙を押さえることが

できず無我夢中で先生の棒にくだり見ていた。おそらくあの感激は私だけでなくあのステージを経験した者全ての胸にいつでも忘れられずに生きていくであろう。

早川先生の決意の背景については、実は現在でも一部謎に包まれている。しかし当時の先生の言によれば直接の原因は仙台のステージで棒の振りまがいをやってしまい、その時に辞めようと思ったということであった。

そして10年間という長年月、常任として指揮を務めていただいた結果、本来厳格であるべき指揮者対楽団員の関係が往々にしてなれあい関係になってきていることから新しい指揮者と交代した方が良いと考えられた事、それまで同胞の関係で部員と接して来れたが、世代のずれというか新しいオケマン気質にどうしてもなじめなくなってきたこと、オケが近年同好会化、お遊び化してきており、アマチュアとはいえ精一杯、最高の音楽に向けて厳しく向かっていく、先生の音楽における行き方に反することなどを述べられた。

旅行を終えて東京に戻った我々執行部は、この、早川先生去りし後のオケが全くイメージできず途方にくれつつも、現実はそのとして先生の御忠告を最大限に我々の足がかりとしつつ、オーケストラの体質改善の為に様々な機構の改正を具体案として示し、一方において、新指揮者の選定、そして駒場祭、1月定演の準備にとりかかったのである。この時点での改革案は、執行部の管理者的発想をたち切り、部員各個人の平等の参加による討論の過程を踏む中で各活動の意義を改めて考え、その上で民主的に、主体的に活動を起こして行こうとするのであり、そうすることによって、部員が主体的にとりくむ時、必然的に音楽的厳格さも生ずるのであろうし日常活動でのモラルの問題も解決されるのではないかというものであった。この案は夏の合宿の席上、執行部案として提出され、多くの議論を呼んだが修正をほどこして総会決定され、その新体制のもとで以後の活動を行うものとした。この案の作成には我々執行部は最大限の努力をし、これはかつて例をみない東大オーケストラ成文法ともいうべきものであった。今から考えると、これはあくまで形式を整備したに過ぎず、実は根本的問題は形式よりもむしろ部員各人の意識にあった訳で、その後激化する東大闘争過程の中で、この形式を実行することすら難しくなり、一方では益々意識のずれが明白になっていく過程で、その改革案はいつしか忘れ去られてしまった訳である。次期執行部はまさにこの意識の変革を目標としてスタートした訳であるが、それが本質的半永久的課題である以上、障害はそれだけ大きく、結局その壁を打ち破る

ことなく現在に至った訳であるが、現状の示す通り、効果的方法論は全く見出せないことは事実ではあるが、68～69年のこの音楽をめぐる意識をめぐってのでき事を正しく受け止めて、永久的課題としてとりくむ事を忘れるようなことがあってはならない。

とにかく、実現までこぎつけたこの新体制にとってきつそくの問題は、駒場祭出演、定演、次期演奏旅行と続くスケジュールを本質的に評価し直した上で行うに当たって、進展する東大闘争との関係とその影響による各学部定期試験のずれ等の大学スケジュール予測の困難に対していかに切り抜けるかにあった。

新体制でのいくつかの討論機構を一応運用して、討論が重ねられた結果、結局駒場祭中止、定演を開催、次期演奏旅行は保留ということになる訳だが、さし当たりの定演に関しては当時、緊急課題として執行部を大いに悩ませたものであった。

東大闘争という対社会的にも重要な時点において、演奏会という活動そのものがどういう意味を持つのかという問題がいろいろな面から話し合われた。こうした過程は、定期演奏会プログラムに簡単に述べてあるが、しかし最後まで統一見解が得られなかったのも事実である。以上、討論に際しては、執行部は新体制にのっとってできるだけ詳しく討論資料を配布し各委員会、総会において、討論会を重ねて、一つ一つ決定していった訳であるが、この頃の執行部を一般部員とのコミュニケーションを元にした決議機構は、新体制にあって評価されるべきだと思う。

結局11月下旬の総会において定演を行うこと、指揮は再度、客演として早川氏にお願いすること、決定に参加した部員は出演義務を負うこと、情勢変化においては、再度総会にて話し合う事などを骨子として、定演実施が決まったのである。

この頃になるとオケ内部も大学内も騒然としてきて、その中において冷静な判断をもち続ける事は難しかった。私もとにかく一方では、面倒な時期に総務などおおせつかってついていないなどと思いつつも、日夜オケに明け暮れて、死にもの狂いでがんばったつもりである。

とくに年が明けて、いよいよ大詰めを迎えて、練習場である2食の建物为民青系外人部隊の宿泊所と化し、封鎖されるという事態に至った。かろうじて必要な楽器を運び出し、渋谷のカワイ楽器の練習室を借りて楽器は毎夜マイカー一族がもち帰るという緊急手段で、どうにか切り抜けた。練習にかけつける部員の中には直前までヘルメット・ゲバ棒で活躍してきた者や、様々な集会に出ていた者などが半数を占め、包帯姿も目につくようになっ

ていた。又一方では全くのノンポリもかなり多かったようである。11月の総会での最終決定後は部員一同責任感を忘れず、あの大変な時期としては充実した練習が積めたと思われる。時に直前の1週間の練習では毎回の練習に多くの障害の中で良くやってくれたものだと、今さらながらうれしく思うのである。

しかしながら、演奏会予定日の1969年1月19日は歴史的にも大変な日となってしまった。いままでもなく、安田岩の機動隊による封鎖解除の日である。8500名の武装機動隊の空から、地上からの攻撃で多くの学友が負傷して行った。

当日、控室で、舞台のそばで、トランジスタラジオの報ずるニュースに耳を傾けつつ、今ここでモーツァルトを、ブラームスを優雅に奏でようとしている自分達にとって、これほどまでにしてやる音楽とは何か。定期演奏会とは何か。誰も考えたであろうし、そして誰にもわからなかったのではなからうか。もはや満員の観客を迎えてそんな事を口に出すことはタブーとなっていた。ここまできたらとにかく立派な演奏を、という気持だった。執行部と有志で、何かやれる事はないかと考えて、私が総務としてオケを代表して観客にメッセージを述べることにした。しかし、オケとしての統一見解などなかったのだから、何も言えるはずはなかった。

私の総務の務めは、この演奏会の終演と共に終わった。いや本当はまだまだやるべき事はあったに違いない。しかし総務に就任した時からは想像もできないようなでき事に直面して、この1年間、心身ともに疲れ切ってしまう、後は何もやる気が起こらなかった。

それにつけても、結局定演まで早川先生にお世話になってしまった。私の総務在任中早川先生の助けがなければ何もできなかった事は誰も認めるだろう事実である。あの弘前のステージでの思い、そして文化会館のステージでの思い。あの2つのステージは私にとって忘れがたい思い出となるであろう。そしてあの2つのステージで感じたこと、すなわち、我々は何故音楽をやるのか、我々のやるべき音楽とは何か、という問いかけを今後も常に持ち続けねばなるまい。又、早川先生の指摘された、東大オケの同好会化の傾向についても、少くとも私の考えでは先生に賛成であるが、それなりに新しい形態で再建するにつけても、十二分な討論の過程を踏み1968年以降のオケの経験を生かしてもらいたいものである。

(工学部在学中)

## オーケストラの将来のために

昭31農卒 Vc, Hr 前常任指揮者

早川正昭

東大オーケストラを10年間も握らせていただいて、色々楽しいこと、つらいこと、思い出は沢山あるが、10年間を全体として眺めてみると、世の中の移り変わりが、そのままオケにも反映している事に気付く。小生が下級生だった頃は、演奏旅行中に、ちょっと態度が悪いとこっぴどくどなられたものだった。指揮者として再びオケに顔をつっこんだ昭和34年頃には、まだ上級生は下級生に対して権力があり、練習中のミス等を、厳しい目つきでにらみつける何人かのお目付役が存在していた。それが、時代が下るに従ってだんだん人数が少なくなり、ついには、1人か2人になってしまい、規律や音楽に厳しい人が、何となく特殊な人(奇人)といったような感じで見られるようになってしまった。上級生と下級生間の権力の差はなくなり、皆、物わがりの良い上級生になってしまい、下級生にちやほやして、過保護の状態を現出し、終いに、あと片づけを上級生がやっているのに、下級生は、知らん顔と言う様な状態にまでなった。オーケストラのように、各専門が分化し、また弦セクションのように、等質な集団をも含んでいるような団体では、こうなってしまうと、運営が大変むづかくなる。オケと言うものは、もともと封建的な要素が多く存在しているものなのである。オケは、理想的には民主化し得ないものなのではなからうか。民主化されすぎてしまうと、どうにも動きがとれなくなるような気がする。

この10年間に、オケの実力は急速に上昇したと言える。ドイツ行き寸前の妙高での合宿に、トレーナーとして来ていただいたN響のメンバーの人達が、我々の「ドン・ファン」を聞いた直後の実録を記せば

A「おい、おれたち帰ろうよ」

B「ほんとだ、用はないよ」

C「毎月違う曲を、こんな演奏に、仕上げるのは、一体どうやっているんだろう。」

B「ばか、毎月こんな演奏を次々とやれたらプロだよ」といった具合である。

多くの人達の暖い御助力のお蔭で、ドイツでは予想もしなかった程の好評だった。この10年間部員が毎年のように増加し、特に管楽器の人がふえた事もあって、曲目の難しさは、エスカレートする一方であった。「火の鳥」や「幻想」「ティル・オイレンシュピーゲル」は、他の

大学でも演奏するようになったが、最初にとり上げたのは我々である。ラヴェルの「スペイン狂詩曲」や「ダフニスとクロエ」、ベルクの「ヴォツェックより3つの断章」、バルトークの「オーケストラのための協奏曲」等は当分どこもやれないのではなかろうか。大曲をやるばかりかが能ではないが、ともかく、この様な難曲を聞かせられるようになったのだから大変なものである。このような急激な進歩の秘密はどこにあるかと言うと、前に述べた、お目付役の存在が特に物を言っている。練習の出席をきびしくした事、1人1人の出す音に責任をもたせた事、多少無理でも、高い目標にがむしゃらに突進させた事。「ドンファン」の演奏に対するドイツの批評に次のようなのがあった「若者達が、R. シュトラウスに向うと言う理想主義に先ず感動させられた」。そこには火の出るような熱情があり魂があったのだ。私も、学生オーケストラの指導には、多少は自信があるが、私は、怒るのが下手でその点では全く自信がない。私がめったに怒らない故もあって、何人かのお目付役が、にくまれ役に廻らざるを得なくなり、その人達のお陰で私の練習方法が推進できたと思っている。私が、10年間にできた事は、ただ時たま、専門家としての助言ができたと言う事だけであろう。かえって、私が出たものの方が多いと

思う。

最近になって階級制の崩壊と共に、目立つ現象は、演奏に自発性が少なくなってきた事である。以前は、歌いすぎるのを抑えなければならなかった事もあった。だんだん技術的に程度が高くなったので余裕がなくなったのかも知れないが。こちらが何も言わないとちっとも歌わなくなってきた。また、音楽を真剣に追求しようとするよりも何となくただ楽しければ良いと言う考えの人も多くなって来た。頼りになるお目付役も居なくなって、私としても限界を感じ、辞意を表明した時、具合の悪い事に、東大闘争が悪化して、オケとしても根本から覆えされたような事になってしまい、タイミングが悪かった事を大変申し訳ないと思っている。

今後の再建を期待しているが、オケが、単なる娯楽になり下ってしまわないように、あくまでも、良いものを追求すると言う信念を失わないでほしいと思う。単なる娯楽であるには、オーケストラは、手間がかかりすぎる。オーケストラを苦勞してやってゆくからには、その苦勞に見合っただけの、素晴らしいものを手に入れていただきたい。良いオーケストラには、そして良い音楽には必ずそれがあると思う。

(作曲家、広島大学助教授)

## 雑 記 帳

### ◇音楽部の生んだ楽界関係者

音楽部OBは管弦楽、合唱をあわせて約1000人に達しているが、この中には音楽を職業とするようになった人もかなりの数にのぼる。特に作曲家は多く、大正10年卒の箕作秋吉氏をはじめとして飯田信夫、紙恭輔、中村太郎、繁田裕司(三木鶏郎)、柴田南雄、塚谷晃弘、入野義朗、戸田盛国(邦雄)、別宮貞雄、伊藤隆太、池田正義、早川正昭らの各氏らを生んでおり、日本の作曲界の大きな部分をなしている。また評論の分野では有坂愛彦、長谷川千秋、徳丸吉彦、皆川達夫、

丹羽正明らの各氏がいる。そのほか文化庁長官今日出海氏、N響事務長の長谷恭雄氏、札幌事務局の太田泉氏らも音楽部OBである。

### ◇オケ内結婚

オーケストラのOB同士で結婚したカップルは今知られているだけで9組あり、すべて昭和38年以降の卒業生に集中している。38年から45年までに卒業した女性19人ほどであることを考えるとかなりの高率といえよう。このうち同じ学年同士の組み合わせが6組にのぼり、パート別ではクラリネット=ヴィオラの組が3組ある。